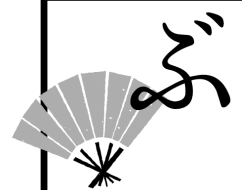


古典落語



に学



落語家
立川談四楼

第五十八回 ねぎまの殿様とのさま

寒

い冬は殿様も鍋であつたまりたいものでございます。

「三太夫、供をいたせ。お忍びで町の探索じゃ。近ご

ろ流行りの鍋はあるか?」「は、ねぎま鍋というものを職人や

商人が好んで食すと聞いております」「どういふものじゃ」「普

段は食さない鮪まぐろのトロ(脂身)や血合けがひいを葱ねぎと煮るのでござ

います。鮪の出汁だしが葱に染み込み、鮪も葱も両方うま旨く食せるそ

うで、しかも安価とか」「それじゃそれじゃ、早く案内をいた

せ」「ここですが、ここは俗に煮売り屋と申しまして、町人が

飲食をする場所、殿のようなご大身が入る店ではございません」

「苦しゅうない、入るぞ」

「いらっしゃーい! お二人さま、お宮下へご案内ーい」

「おお、威勢のいい小僧じゃ。お宮下とは何じゃ」「大神宮様

の棚の下で、うちの店の特等席です」「おお、世辞もよい。こ

れ、床しょうぎ凡しやうきを持ってまいれ」「そんなものはありませんや。醤油

樽たるが伏せてありますから、そこに腰かけてください」「なるほ

ど、そうなっておるのか。おお、みんな鍋を食しておる。三太

夫、早くあつち逃にげえろ。小僧、酒はあるか」

「サブロクとダリがでございます。サブロクが三十六文でダリが

四十文、わずかな違いですが、味は段違いです」「ではそのタリを」「承知しました。タリ、一升」「おお、景気がよいのお」

お殿様は銚子に猪口と思っていたが、出てきたのはなみなみと注がれた枅酒で、おお、熱々の鍋に冷や酒かと、その組み合わせをたいそう喜んだ。

美

味じゃ美味じゃと頬張っていた殿様が途中、「熱い、三太夫、この葱は鉄砲仕掛けか」

「いかなさいました？」「葱から熱いものが飛び出して、喉をやけどするかと思った」

「それは囁んだ折に葱の芯が飛び出したのでございます」「左様か、しかし葱の白いところも青いところもこれほど美味なものとは知らなんだ」

外は筑波おろしが吹きすさぶ江戸の町々、そんな中でねぎま鍋と枅酒が大変気に入り、お殿様はご機嫌で屋敷に帰った。

一日、二日は何ともなかったが、三、四日経つと、殿様に元気がなくなった。どうにもねぎま鍋が恋しくてならない。ねぎま鍋がチラついてたまらないのだ。賄い方が心配して、三太夫に尋ねた。「殿の食欲がガクンと落ちております。近々になにかございましたか？」

三太夫は仕方なく、先日のお忍び一件を話した。

「えっ、殿がねぎま鍋を？」「そうじゃ、大変気に入っておる。すまんが作ってやってくれぬか」

さ

あ賄い方は困った。作ったこともなく、鮪の脂身や血合いが腹にさわるといけない。そこで赤身を角切りにして茹でた。葱も細いのを湯通しして、昆布出汁で出した。

「違う、これはねぎま鍋ではない！もっと野趣あふれるものじゃ」三太夫は覚悟を決めた。殿が腹を下したら、自分が腹を切れば済むことだと。

三太夫の助言によって再びあのねぎま鍋と同じものが供された。さあ殿の喜ぶまいことか。

「おお、これじゃこれじゃ、これを食したかったのじゃ。臭い消しにちゃんと生姜も入って、枅酒も付いておる。おお、雪が降ってきた。雪見酒だ。何もかもねぎま鍋じゃ。三太夫も賄い方も褒めてつかわすぞ」「ははあ、ありがたき幸せ」

「……しかし何か欠けておる。町人による店の喧騒は望むべくないが、何かが――」

殿様は自分が座っている分厚い座布団に触れた。

「そうじゃ、醤油樽を伏せて持ってまいれ」